

米国と日本におけるタイプA行動研究
—その研究動向と課題—

坂野雄二* 瀬戸正弘** 嶋田洋徳** 長谷川尚子**

Research on Type A Behavior Pattern in the US and Japan:
Recent Trends and Problems

Yuji Sakano *, Masahiro Seto **, Hironori Shimada ** & Naoko Hasegawa **

Abstract

Since the "Type A Behavior Pattern (TABP)" was proposed by Friedman & Rosenman (1959), it has been recognized as a risk factor for Coronary Heart Disease (CHD) in many countries, especially in the United States. In Japan also, much research on TABP has been conducted in the last decade. However, there may be conceptual confusion in the Japanese TABP studies.

For example, these days, in the United States, "Hostility" is reported to be the most significant pathogenic indicator for Coronary Heart Disease among several components of TABP. On the other hand, in Japan, TABP, which was originally a risk factor for Coronary Heart Disease, is said to be associated with depression-related personality, such as "Typus Melancholicus".

The purpose of this study is to review the research on the TABP in the US and Japan from the viewpoints of concept of the TABP, its history, its assessment, and fields in which the TABP has been discussed. This study also contrasts both countries in order to characterize the Japanese Type A Behavior Pattern, which is specific for the Japanese population. The necessity for developing scales measuring the Japanese Type A Behavior Pattern is discussed and our preliminary study on scale development is introduced.

Key Words: Type A Behavior Pattern, Japanese Type A Behavior Pattern, review, recent trend, research problems on TABP.

【はじめに】

「健康価値追求の時代」であるといわれている

現代では、臨床や公衆衛生の専門家、医者、心理学者だけではなく、一般の人々までもが健康やさ

* 人間健康科学科

** 早稲田大学大学院人間科学研究科

* Department of Human Health Sciences

** Graduate School of Human Sciences, Waseda University

さまざまな病気の原因について強い関心を寄せるようになった。

特に今日の代表的な疾患であるガンや心臓病の危険因子としてストレスやパーソナリティや行動様式などが強調されているなかで、タイプA行動パターン (Type A Behavior Pattern: 以下、タイプA行動と記す) が冠動脈性心疾患 (Coronary Heart Disease: 以下、CHDと略記する) の危険因子であるという認識が高まり、とりわけ米国においてタイプA行動がCHDの危険因子の1つであることは常識となりつつある。

近年わが国でもタイプA行動については次第に関心が高まり、学会や研究会等で議論が盛んに行われ専門誌や専門書が発刊されている一方で、一般紙やテレビジョン等のマスコミでもタイプA行動が取り上げられることが多くなった。しかし、その反面で、いわゆる「グローバルタイプA行動」とCHDの関連に疑問がもたれたり、日本人のタイプA行動とグローバルタイプA行動との間で相違点が指摘されたり、元来行動パターンとして提唱されたタイプA行動が、人格や性格として扱われるなどその概念に混乱が認められるようになった。

そこで本総説では、タイプA行動に関して概念的整理を行なったのち、歴史、各研究領域からのアプローチ方法、タイプA行動の査定法など多方面からこれまでの研究を概観してその現状を整理し、さらに日本人のタイプA行動研究の今後の課題を探ってみることにする。

【グローバルタイプA行動】

タイプA行動とは、CHDの罹患の恐れが多い特有の一連の行動様式、および潜在している心理的傾向がより高いものを指す (Blumenthal, 1990)。

タイプA行動は、1959年、アメリカの心臓病医 Friedman & Rosenman によってCHDの新しい危険因子として提唱された。彼らは自分たちの患者がいくつかの特徴的な行動様式を示すことに気づき、そのような行動的クラスターが患者の心臓発作を引き起こすと確信した。このタイプA行動の特徴は、①自分が定めた目標を達成しようとす

る持続的で強い要求、②競争を好みそれに熱中する傾向、③永続的な功名心、④時間に追われながらも常に多方面に自己を関与させようとする傾向、⑤身体的精神的な著しい過敏性、⑥強い敵意性や攻撃性、⑦大声で早口にしゃべること、などである (Friedman & Rosenman, 1971; Rosenman, Swan, & Carmelli, 1988)。さらに、Rosenman & Friedman (1961) は、タイプA行動パターンの反対像、すなわち非タイプA行動パターンをタイプB行動パターン (Type B Behavior Pattern) と呼んだ。また、前田 (1989) によれば、現在一般的に知られているタイプA行動の特徴としては、常に時間切迫感、緊張感、焦燥感をもって速く行動し、熱中の、精力的、持続的に目的遂行に向かって没頭し、他者への競争意識、敵意性、攻撃性が強い、という点があげられている。

以上のようにアメリカを中心に概念化されてきた従来からのタイプA行動が「グローバルタイプA行動パターン (Global Type A Behavior Pattern)」であるが、ここでわれわれは、タイプA行動は、本来外部からの観察が可能な行動 (Behavior) のクラスターであり、人格 (Personality) や性格 (Character) ではないという点に注意しておかなければならない。したがって、「Type A Behavior Pattern」の訳語として、わが国では、「タイプA行動パターン」、「タイプA行動特性」、「タイプA行動性格」などが混在しているが、なるべく直訳に近く「タイプA行動パターン」あるいは「タイプA行動」とするのが望ましいと思われる。この点に関しては、タイプA行動の変容を考える際、たとえば行動科学的アプローチに基づく介入を行う場合に重要な意味を持つものと思われる。

ところで、先に述べたように、近年アメリカでは、タイプA行動とCHDの関連に疑問を投げかける報告が現れている。たとえば、冠動脈造影を用いてタイプA行動と冠動脈硬化の関連性を検討した Matthews & Haynes (1986) や Dimsdale, Hackett, Hutter, Block, Catanzano, & White (1979) の研究や、Multiple Risk Factor Intervention Trial (MRFIT) のような疫学的研究 (Shekelle, Hulley, Neaton, Billings, Bor-

hani, Gerace, Jacobs, Lasser, Mittlemark, Stamler, & the M R F I T Research Group 1985) などにおいて、タイプA行動がCHDの危険因子であるという見解を支持しない結果が報告されている。このような状況の中で現在注目を集めているのが、WilliamsやDembroskiらによって提唱されている「敵意性 (Hostility)」の問題である (Williams, Haney, Lee, Kong, Blumenthal, & Whalen, 1980; Dembroski, Macdougall, Williams, Haney, & Blumenthal, 1985)。彼らは、タイプA行動の諸特徴の中でも敵意性こそがCHDの重要な危険因子であって、他の特徴はそれほど重要ではなく、かえってノイズ的な効果を及ぼしていると主張している。この主張に関しては、さらに反論 (Thoresen & Powell, 1992) が存在するが、いずれにせよ、グローバルタイプA行動の概念的妥当性は再検討を必要とする状況にある。

【米国におけるタイプA行動研究の歴史】

先に述べたように、アメリカの心臓病医 Friedman & Rosenman (1959) は、自分たちの患者がいくつかの特徴的な行動様式を示すことに気づき、そのような行動的クラスターが患者の心臓発作を引き起こすと考えてCHDの新しい危険因子としてタイプA行動の概念を提唱した。

さらに Friedman と Rosenman らは、Western Collaborative Group Study (WCGS) と呼ばれる研究においてタイプA行動のCHD予見性についての疫学的実証を試みた。1960年からの、カリフォルニア州在住の男性企業勤務者 3,154名を対象とした8年余の追跡で、年間1,000人当りのCHD発症率は、タイプA行動者から13.2人、タイプB行動者から5.9人となり、タイプA行動の者が約2倍と有意に高率であることが示された (Rosenman, Brand, Jenkins, Friedman, Straus, & Wurm, 1975)。1965年から同様の調査が行われ、ここでもタイプA行動の者はタイプB行動の者と比較して約2倍のCHD発症率を示したが、これが Framingham Heart Study と呼ばれる代表的な疫学的研究である (Haynes, Feinleib, & Kannel, 1980)。

ところで Friedman & Rosenman (1959) が、最初に認めたタイプA行動パターンとは、外見上明らかに観察できる特徴であった。したがって、その評価法としては面接法 (Structured Interview: 以下、S I と略記する) が用いられ、質問に対する答えの内容よりはむしろ、声の大きさ、話す速度、質問を受けてから応答するまでの間の速さ、焦燥感と攻撃的な態度などによって判定された (Rosenman, Friedman, Straus, Wurm, Kositchek, Hahn, & Werthessen, 1964)。しかし S I が時間的経済的に低効率であることから、Jenkins, Rosenman, & Friedman (1967) が、質問紙法 Jenkins Activity Survey (以下、J A S と略記する) を開発した。この J A S は広く普及してタイプA行動に関する研究の進展に貢献し、以後開発される質問紙の標準となった。

一方、これらの研究とは別に、Blumenthal らや Zyzanski らは冠動脈造影を用いて冠動脈硬化度とタイプA行動との関連を検討し、タイプA行動の者はタイプB行動の者に比して強い冠動脈硬化を示すという結果を得ている (Blumenthal, Williams, Kong, Schanberg, & Thompson, 1978; Zyzanski, Jenkins, Ryan, Flessas, Everist, 1976)。

以上のような初期の疫学的研究や冠動脈所見による実証、普及版質問紙の開発等によって、米国ではタイプA行動に関する研究が定着し、さらに、タイプA行動がCHDの危険因子であるという見解も広く認められるようになった。1981年には、National Heart Lung and Blood Institute (NHLBI) が、CHDに対するタイプA行動の危険度は、高血圧、年齢、喫煙など他の危険因子と同程度であると結論を下すに至った。

しかしながら、この NHLBI の結論と同時期には、既に述べたように、タイプA行動全体がCHDの危険因子であるという見解を否定する研究が報告されるようになり、タイプA行動の構成概念の1つである「敵意性」に注目することが新しい研究動向となっている。

【日本におけるタイプA行動研究の歴史】

日本において全国規模の学会で最初に発表され

たタイプA行動に関する研究は、長谷川・木村・関口・中島（1981）であるとされている。長谷川ら（1981）は、CHD患者と健常者の行動パターンの差異を検討し、その結果を「冠動脈疾患者の人格特性」と題する研究にまとめ、1980年の第21回日本心身医学会総会において発表した。しかしながら、それは、Friedman & Rosenman（1959）による最初のタイプA行動に関する報告から実に約20年あまりが過ぎていた。その後、米国の判定法（たとえばJAS）の翻訳導入が進んだのち、研究の流れはおおまかに2つの方向に分かれた。その1つは日本人のタイプA行動を評価するための判定法（特に質問紙法）の開発とそれらを用いて日本人のタイプA行動の特徴を明らかにする研究であり、もう1つはタイプA行動がなぜCHDに至るのかその作用機序を探る精神生理学的研究である。たとえば、前者の研究としては、保坂・田川・大枝・杉田・日野原・五島（1984）や田川・保坂（1991）、後者の研究としては、早野・山田・向井・竹内・堀・大手・藤波（1991）や山口（1991）をあげることができる。ただし、タイプA行動が本当に日本人においてもCHDの危険因子であるかどうかを確認するための追跡研究（Prospective Study）はほとんど進展していないのが現状である。

最近の日本におけるタイプA行動パターンの研究（桃生・木村・早野・保坂・柴田，1990；保坂・田川・杉田・五島，1989）や報告（上畑，1990；前田，1989）によると、欧米人のタイプA行動パターンと日本人のCHD親和性の行動パターン、すなわち日本人のタイプA行動パターンとが必ずしも一致していないことが指摘されている。それは、「行動パターン」の形成、維持には、国民性、文化の伝統、社会習慣などが強く影響を及ぼすためであると推察可能である。特に、前田（1989）は、日本人のタイプA行動の特徴として、①欧米より低率であること、②特に敵意性が低いこと、③仕事中心主義が目立つこと、④集団帰属的で、職階層と関連していること、などを指摘している。

また、几帳面さ、高い要求水準を自己の仕事に求めるメラニコリー親和性性格（Tellenbach，1961）、義務感、責任感、熱中性、徹底性という執

着気質を強くもつつつ親和性性格（下田，1950）が日本人のタイプA行動を形成する要因の1つであることも指摘されている（保坂，1987；桃生，1993）。これに関連して、最近、特に臨床の現場からタイプA行動と抑うつとの関連が指摘され、研究も行われているが（田川・保坂，1993；服部・福西，1993；芝山，1993）、この点についての実証には、今後さらなる基礎的研究が必要と思われる。

【臨床医学におけるタイプA行動のとらえ方—外的環境との関連】

上述のとおり、従来タイプA行動は医学と心理学双方の立場から研究されてきたが、そこにはタイプA行動を1つの行動特性としてとらえて他の要因との関連を研究する流れ（主に医学的な立場）と、タイプA行動そのものを研究の対象とし、その構成要素や内的機序を扱う流れ（主に心理学的な立場）があった。そこで本節と次節ではその2つの立場からそれぞれタイプA行動がどのように研究されているかを追うことにする。

はじめに、本節ではタイプA行動と外的環境との関連についての研究について触れることにする。まず、一般成人におけるタイプA行動者をとりまく外的環境のなかでも、とりわけ重要な要因として知られているのは、職場における職務や職階層である。仕事に対する態度は、タイプA行動の測度として最もよく用いられているJASにおいても、タイプA行動の構成要素として重視されており（Jenkins, et al., 1967；Jenkins, 1971）、職務および職階層とタイプA行動との関連についてもこれまでに多くの研究がなされている。特に日本においては管理職と非管理職を比較すると、管理職においてタイプA行動が有意に高率で認められたという結果（前田，1987）や、企業や官公庁など多業種の管理者間でタイプA行動得点を比較した場合には、競争が最も激しいと考えられる企業でタイプA行動傾向が高くなるという結果（吉竹，1989）、あるいはJAS得点で比較すると管理職が有意に高得点であったという結果（三部・木村・山澤・平山・清見・永井・室田・伊吹山，1992）が得られており、職場に適応するあまり、仕事中心主義に陥ってその結果タイプA行動を生じ、特

に管理職においてその傾向が高くなると理解されている。

また最近では医学においてもタイプA行動とうつ状態との関連が注目を集め、タイプA行動はうつ病の症状とは関連がないが、抑うつ病の病前性格である執着気質やうつ親和性性格とは関連するという研究が日本において数多くなされている(吉竹, 1990; 服部・福西, 1993 など)。その一方で、欧米ではタイプA行動と抑うつとは関連があるという結果は得られていない(Dorian & Taylor, 1984; Light, Herbst, Bragdon, Hinderliter, Koch, Davis, & Sheps, 1991 など)が、福西・中川・中村・尾川・中川(1993)が日本人学生と米国人学生を対象にタイプA行動と敵意およびうつ親和性性格との関連を調べたところ、日本人、米国人共にタイプA行動と敵意、うつ親和性性格との間に有意な正の相関があり、うつ親和性性格に関しては日本人と米国人との間に差がないことを明らかにした。このことからタイプA行動の構成要素として新たに「うつ親和性性格」が加えられる可能性が示唆されたが、この点に関してはさらに検討の余地があると思われる。

その他にも、タイプA行動と個人的資源としてのソーシャルサポート(社会的支援)との関連などについて研究がなされているが(Blumenthal, Burg, Barefoot, Williams, Haney, & Zimet, 1987; Orth-Gomer & Uden, 1990)、このような立場から行われる研究で留意すべき点はFriedman & Rosenman(1959)の定義に含まれる行動特徴は互いに関連がなく、独立しており、どのような感情がタイプA的な行動を生起させるのか、つまり個人の認知をも含めたタイプA行動の構造自体が明確になっていないということである。このことはSmith & Anderson(1986)やThoresen & Powell(1992)が指摘するとおり、タイプA行動とCHDの関連については多くの研究が行われているにもかかわらず、その結果には一貫性が見られず、タイプA行動自体の概念や測定法についての再考を必要としているということを指している。つまり、内的機序を含むモデルや測定方法が明確にされない限り、タイプA行動を1つの行動特性としてとらえて他の要因との個々

の関連を見出したとしても、タイプA行動者やタイプA行動を包括的に把握したことはない。また何らかの介入を試みる場合にも、タイプA的な行動を変容させてもタイプA行動の背景に元々、認知的な歪みが存在していた場合には、その認知的側面に対しても何らかの介入を考えなければならない。つまり、行動的側面に関する記述だけではなく、認知的側面にも着目した研究が必要であろう。そこで次節ではこれまでに行われた認知的側面からのタイプA行動に関する研究を概観してみたい。

【心理学におけるタイプA行動のとらえ方—その内的機序】

従来タイプA行動は行動クラスターとしてとらえられていたため、その認知的側面に着目してそのような行動が顕在化するプロセスを示した統合的概念は少ない。しかし、たとえばGlass(1977a)はタイプA行動を環境への強いコントロール欲求の現れとして概念化し、Price(1982)は認知的な社会学習理論の立場から、タイプA行動を社会的に学習されたいくつかの認知的信念に基づくものとしてとらえた。

Price(1982)はタイプA行動の背景となる3つの認知的信念の中でも特に「自己の存在価値を証明しなければならない」といった信念を重視し、タイプA行動に含まれるさまざまな要素を適合的に関係づけてFig.1に示すようなモデルを提唱した。このモデルは詳細に実証されたものではないが、タイプA行動者を取りまく現代社会とタイプA行動者との様相が概念的によく表されているものといえる。

また、長谷川と小杉(1993)は、時間的態度や時間的展望の側面からタイプA行動をとらえ、タイプA行動は計画性(時間を計画的に使う傾向)および持続性(1つの仕事をやり終えるまで続ける傾向)と正の相関があり、さらにタイプA行動者は未来をポジティブにとらえていることを明らかにした。それを踏まえて長谷川(1992)は時間的展望の観点からタイプA行動の内的機序をモデル化し、そのモデルをパス解析による多変量解析を用いて実証を試みている(Fig.2)。このモデル

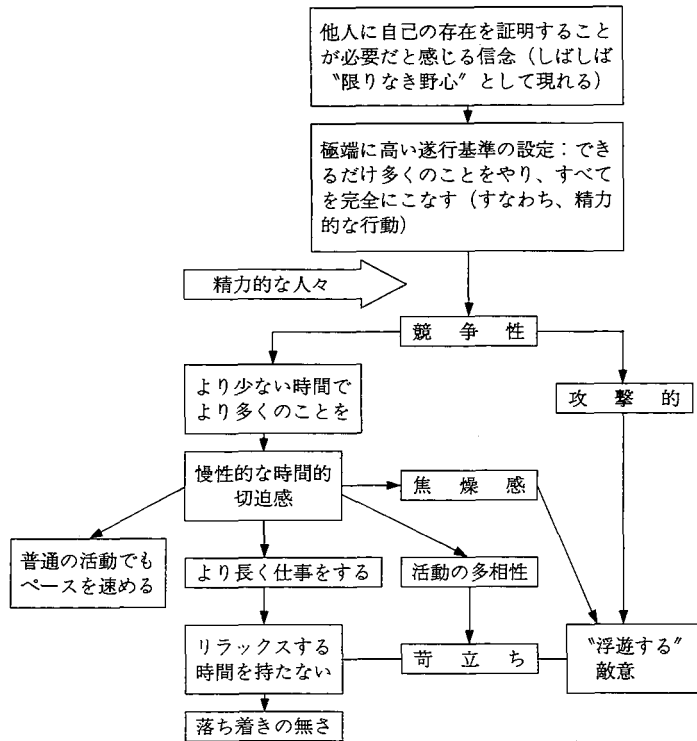


Fig 1 タイプA行動の統合的モデル (Price, 1982)

では、タイプA行動者が失敗経験を自己の内面に帰属させること (Brunson & Matthews, 1981) からネガティブな過去を体験することで計画性および持続性という対処行動が生起され、さらに計画性に活動性が加わって競争心を形成し、また達成動機の高い者は未来をポジティブにとらえること (Green & Knapp, 1959) から、競争心は未来をポジティブに評価することにつながるとされている。さらに、敵意と活動性がネガティブなことを経験する状況におかれる (ネガティブな現在) といふ状態を形成し、さらに活動性が関与して、いらだちは時間的切迫感に変化し、最終的に時間的切迫感、活動性、競争心、ポジティブな未来、持続性が直接タイプA行動に影響を及ぼすという関係が見られる。この概念的モデルはタイプA行動を構成する要素を時間的展望の観点から関連づけて、その認知面に着目したモデルであるが、未来をポジティブに評価するタイプA行動の背景にはネガティブな過去や現在が存在していることがわかる。このようにタイプA行動の内的機序を

らかにすることでその核となる信念や感情が明らかになれば、そこに焦点を絞った具体的な認知的介入を行うことも可能になるため、今後はこのようなタイプA行動の認知的側面に関する研究が望まれる。しかし長谷川 (1992) によって提唱されたモデル (Fig.2) は、統計的に支持されたとはいえず、過去から未来への時系列の流れがどれだけタイプA行動の説明力を持つのかなど、モデルの概念的妥当性について検討すべき点が多く残されている。

ところでタイプA行動に潜む信念に関して、Burke (1984) は Price (1982) が提唱したタイプA行動の背景となる信念からタイプA行動者の持つ不合理な信念や不安の尺度を開発し、Hamberger & Hastings (1986) はタイプA行動と競争やコントロールすることに対する過度の欲求を反映した信念との関連が見られたことを報告している。さらに Grimm & Yarnold (1984) はタイプA行動者は、タイプB行動者と比較すると常に試験においてより高い目標を設定することを明らかにし

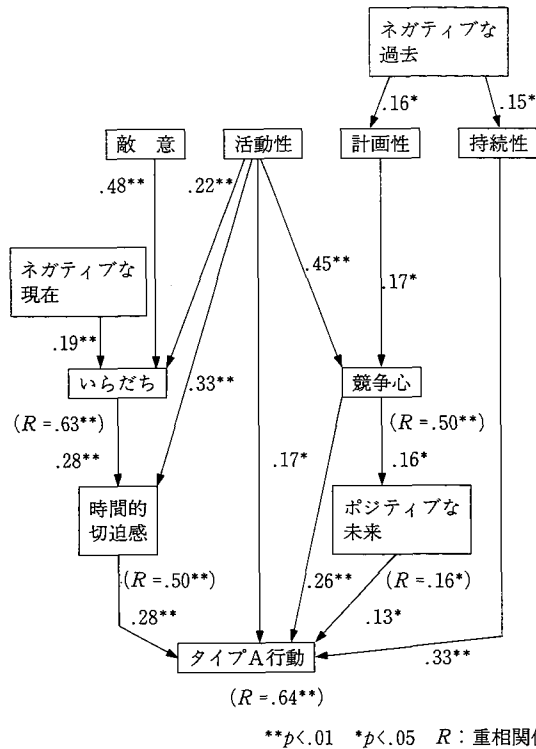


Fig 2 時間的側面からとらえたタイプA行動の構造 (長谷川, 1992を一部改編)

た上で、課題遂行や課題達成場面における自己評価に関して不合理な基準を持っていることを示唆し、これと同様に Smith & Brehm (1981) もタイプA行動は達成に対する自己規準についての不合理な信念と関連していることを報告している。このように長谷川 (1992) で明らかにされたタイプA行動とネガティブな過去と現在との関連、また Hamberger & Hastings (1986) などの研究で示された不合理な信念との関連を考えあわせると、タイプA行動の背景にはネガティブな感情が存在することが推測され、たとえば Hamberger & Hastings (1986) で明らかにされた競争やコントロールすることに対する過度の欲求を反映した信念は、コントロール不可能場面に陥った場合にうつ状態を引き起こすと考えられる。

この点に関して、Glass (1977a) は、タイプA行動と学習性無力感の関連について、タイプA行動者は、自分の努力が結果をコントロールできないストレス状態が短い場合、それに続くコントロール可能事態でコントロール確保のために精力的

な努力をするが、コントロール不可能事態が長引くと、タイプB行動者に比べて学習性無力感効果があらわれやすく、再びコントロール可能事態になっても、パフォーマンスが伸びないという報告をしている。坂野・瀬戸・前田・東條・佐藤・杉山・上里 (1990) や瀬戸 (1993) は、この Glass (1977a) の報告とこれまでの先行研究 (前田・東條・坂野, 1988; 東條・前田・坂野, 1990) の結果を踏まえて実験的研究を実施し、タイプA行動者の行動遂行、認知的活動、そして情動的变化について、自己効力感の理論、動機づけの理論、学習性無力感の理論などを参考にして検討を加えてきた。この点に関して、瀬戸 (1993) は、現在までの研究の知見を以下のようにまとめている。すなわち、①タイプA行動者の自己効力感は、コントロール不可能事態では著しく低下するが、コントロール可能事態になると上昇に転ずる、②タイプA行動者の動機づけは、コントロール不可能事態では著しく低下する、③タイプA行動者の自己効力感認知が最も低くなるのは、コントロール不可能事態

の最中よりもむしろ、その直後のコントロール可能事態初期にずれる傾向がある、④タイプB行動者は、タイプA行動者に比べ、自己効力感、動機づけ共に、コントロール不可能事態での低下、可能事態での上昇の程度が小さい、⑤タイプA行動者は、コントロール不可能事態において、タイプB行動者と比較して情動面（抑うつ気分）での変動が激しい、などの諸点をまとめている。また、自己効力感の概念が臨床的に大きな意義を持っていること（坂野，1990）、タイプA行動がCHDとの関連だけではなく、抑うつとの関係においても注目を集め始めていること（前田，1991；桃生他，1990；白川・桃生，1990）などを考えあわせると、今後、この点に関する研究の必要性は高まっていくと考えられる。

【ストレス研究におけるタイプA行動のとらえ方】

ところで、一般に心理的ストレス研究においては、Holmes & Rahe (1967) の提唱した一過的で急性的な「life events」よりも、Lazarus & Cohen (1977) の提唱した持続的で慢性的な「daily hassles」の方がストレス症状により高い説明率を持つストレスラーであるということは広く知られているところである。さらに、Lazarus & Folkman (1984) は、daily hassles の概念を踏まえ、経験した出来事に対する認知的評価やコーピングという個人の認知的、行動的側面に焦点を当てたストレス理論を提唱した。この理論では、その人がその出来事をどのように認知的、行動的に対処するのが重要視されている。そして、この対処がどのように行われるのかについては、個人の価値観や信念、あるいは個人を取り巻く社会的、環境的要因に依存していると考えられている。

このようなストレスへの対処という観点からの心理学的研究は著しい進歩を遂げた。しかし、その鍵となる概念である「対処方略 (coping strategy)」と「対処スタイル (coping style)」をどのようにとらえるのかについては、まだ統一された見解がないのが現状である。この中でも、認知的対処方略に限定すれば、Lazarus & Folkman (1984) の提唱した「問題焦点型対処 (problem-focused

coping)」と「情動焦点型対処 (emotion-focused coping)」に分類できることが広く知られている。しかし、実験的検討が行われる際には、この分類に限られることはなく、intellectualization (Speisman, Lazarus, & Mordkoff, 1964), repression-sensitization (Byrne, 1961, 1964), monitor-blunter (Miller, 1979; Miller & Grant, 1979), avoidant-vigilant coping (Averill, 1973) といった多様な分類がなされているものの、これらの概念の相互の関連や区別は明確にされていない（神村・山野・岡安・嶋田・坂野，1992）。このストレスラーに対する対処方略や対処スタイルの中の概念においては、タイプA行動は、ある程度人格から独立した特定の状況で生じる「対処方略」ではなく、かなりの程度まで個人に固定的なパーソナリティ変数である「対処スタイル」として概念化されている。このタイプA行動という観点から対処スタイルを扱った研究としては、Pittner & Houston (1980), Schlegel, Wellwood, Copps, Gruchow, & Sharratt (1980), Diamond (1982), Lovallo & Pishkin (1980), Yarnold & Grimm (1982) などのタイプB行動と比較検討した研究などをあげることができる。

ところで、子どもから成人まで日常多くのストレスラーにさらされている人ほど、さまざまなストレス症状を表出しやすいことが明らかにされているが（たとえば、嶋田・岡安・浅井・坂野，1992；岡安・嶋田・丹羽・森・矢富，1992；尾関・原口・津田，1991 など）、ストレスのレベルが高くても毎日元気に生活している人もいれば、逆に傍らからみれば何でもないようなストレスラーによって簡単にストレス症状を呈してしまう人もいるのが実状である。そこで、こうした個人差に注目する必要がある。

たとえば、この個人差を説明する要因として、「コントロール不可能性 (uncontrollability)」をあげることができる。このコントロール不可能性は、Seligman & Maier (1967) の「学習性無力感 (learned helplessness)」という概念につながるものであることが示されている。つまり、学習性無力感は、コントロール不可能な事態の経験によって、「何をしてもだめだ」という認知が形成さ

れ、その結果としてその後の活動が抑制される現象を指し、それが反応性うつ病の行動論的モデルとなる可能性があるとされている (Seligman & Maier, 1967; Seligman, 1975)。また、学習性無力感状態に陥った生体は、動機づけが低下したり、新奇場面での学習が困難になったり、さらには胃潰瘍などの生理的なストレス症状が生じることが知られている。

これを現実の生活場面に置き換えて考えるならば、さまざまなストレスのコントロール不可能性は、人々を容易にストレスフルな状態へと導いてしまう可能性を持っているということができ、つまり、言うならば、ストレスをコントロールすることができれば、どんなストレスにさらされても重篤なストレス症状にまで至ることはないと考えられる。また、Glass (1977a, 1977b) によれば、タイプA行動を持つ人を、状況をコントロールすることに強い関与を持ち、このことが特にコントロール感を喪失しやすくさせている人であると特徴づけている。そして、状況のコントロールが脅かされ阻止されると、タイプA行動の人はひどく情動的になり、おそらくコントロールを強めようとする過剰な努力とコントロールの欠如への絶望感との間を交錯するという知見が報告され、これらの概念が支持されるに至っている (Pittner, Houston, & Spiridigliozzi, 1983; Rhodewalt & Davison, 1983)。また、動機づけや状況への関与を中心とした研究においては、タイプA行動を持つ人は、社会化することからよりも達成などから報酬を得る人、あるいは失敗恐怖傾向を持つ人であると特徴づけられている (Ditto, 1982; Jenkins, Zyzanski, Ryan, Flesas, & Tannenbaum, 1977; Gastorf & Teevan, 1980; Gastorf, Suls, & Sanders, 1980)。

ところで、これらのストレス症状の表出を軽減する代表的要因として、コーピングをあげることができる (Lazarus & Folkman, 1984)。しかし、タイプA行動の特徴に見られるように、向上心や要求水準があまりにも高いと、ストレスに対してのコントロール可能感が低まり、抑うつ感や無力感を呈すると理解することができる。一方で、

心理的ストレスはタイプA行動特性とは、独立した循環器疾患の危険因子であるという指摘もある (川上・下光・岩根, 1993)。つまり、心理的ストレスもタイプA行動もCHDの1つの危険因子であるということはさまざまな研究で明らかにされているが、実験室実験という特異的状况を除けば、日常生活からもたらされる心理的ストレスとタイプA行動の直接的な関連については、はっきりとした研究結果は得られておらず、さらなる研究が待たれているのが現状である。子どもの場合でもそれらは例外的ではなく、最近の知見 (たとえば, McCann & Matthews, 1988; Woodall & Matthews, 1989; Lawler, Allen, Critcher, & Standard, 1981; Matthews & Siegel, 1983 など) を考慮すると、この分野については、さらなる研究が必要であるといえる。

【タイプA行動判定法の分類と課題】

現在わが国で用いられているタイプA行動の判定法は、欧米で用いられているものの翻訳版と日本で独自に開発されたものとの2種に大別される (Table 1)。以下、主な判定法について概観することにする。

① Framingham Type A Scale :

Framingham Heart Study において実施された300項目の面接質問表からタイプA行動に関連のあると思われる10項目が選ばれた (Haynes, Levine, Scotch, Feinleib, & Kannel, 1978)。回答形式はLikert法 (7件法) である。被調査者は、常に時間に追われているか、精力的で競争的か、急いで食事をするか、などについて質問される。

② Type A Self-Report Inventory (TASRI) :

Blumenthal, Herman, O'Toole, Haney, Williams, & Barefoot (1985) によって、簡単にタイプA行動を評価することができる質問紙が開発された。質問項目数は28問であり、回答形式はLikert法 (7件法) である。大規模な標準データはいまだ得られていないが、その回答と採点の容易さは、敏速にスクリーニングする必要が生じたとき有用であるといえる。

③ Thurstone Temperament Schedule :

Table 1 タイプA行動判定法の分類

I. 米国で開発されたもの	
1. 質問紙法	Framingham Type A Scale Type A Self-Report Inventory (TASRI) Thurstone Temperament Schedule Bortner Type A Scale Jenkins Activity Survey (JAS) Form C; 被雇用者版 " Form T; 学生版
2. 面接法	Structured Interview (SI)
3. 行動観察法	Matthews Youth Test for Health (MYTH)
II. 日本で作成されたもの	
1. 質問紙法	A型傾向判別表 KG式日常生活質問紙 東海大式日常生活調査表 A型行動パターン・スクリーニングテスト Japanese Coronary-Prone Behavior Pattern Scale (JCBS) Coronary-Prone Type Scale (CTS)
2. 面接法	なし
3. 行動観察法	Brief Assessment Scale for Type A in Clinical Setting (BASTACS)

※米国で開発されたもののうち、日本語版が作成されているものはイタリック体で表記してある。

行動の速さと性急さについて測定する調査票で、血圧や心拍率と正の相関が確認されており (Pittner, et al., 1983), CHDを予測できる可能性を持っていると考えられている (Brozek, Keys, & Blackburn, 1966). SIとの相関については、複数の研究で他の測定尺度よりも高い一致率が認められたもの (Chesney, Black, Chadwick, & Rosenman, 1981; Dodd, Conti, & Sime, 1983 など) を除き、概ねそれほど高い関連が示されているわけではない。しかし、Ganster, Schaubroeck, Sime, & Mayes (1991) や Musante, Macdougall, Dembroski, & van Horn (1983) の研究においては高い相関を示しており、特にSIの構成要素のうちの(行動の)速さ、苛立ち、競争心とこの尺度との間に高い相関が認められている。

④ Bortner Type A Scale :

タイプA行動の選別手段としてSIをもとに開発されたもので (Bortner & Rosenman, 1967; Bortner, 1969), 24段階のマグニチュード法を用

いて測定する。対をなす形容詞が両極に配置され、それに対して自分がもっともあてはまると思われる段階に印を付ける自己記述式の判別方法であるが、特に日本における研究ではあまり用いられない。

⑤ Jenkins Activity Survey (JAS) :

①実施や判定には特別の訓練を必要とする、②時間や手間がかかる、③客観性に問題がある、といったSIの問題点を解決するために、Jenkins, Zyzanski, & Rosenman (1979) が開発した質問紙法であり、質問項目はその多くをSIから採用している。現在最も広く普及しているタイプA行動判定法である。ただし、CHD発症の予測性は必ずしも高くはないとされている。現在までにForm C (被雇用者用), Form T (学生用) などが開発されており、日本においても佐藤・杉山・竹川・中村 (1982, 1983), 石原 (1985, 1987, 1990) によって学生用日本語版が作成されている。

⑥ Structured Interview (SI) :

タイプA行動がCHDの危険因子の1つであることを初めて Prospective な方法で証明した Western Collaborative Group Study (WCGS) において開発された面接法である (Rosenman, 1978)。日本語訳は定着していないものの、「構造(化)面接」と訳されることが多い。あらかじめ定められた約20の質問を一定の質問方法 (たとえば、故意に被調査者の敵意をあおるようにゆっくり話すなど、それゆえ Structured と名づけられた) で実施する。その時の被験者の反応に基づいて判定し、判定の際には答えの内容だけでなく、話し方や動作を非常に重視する。タイプA行動判定法の規範とされている。

⑦ Matthews Youth Test for Health (MYTH) :

MYTHは、他者評定質問紙であり、幼稚園や小学校で教員が、受け持ちの子どもについて評定を行うようになっている (Matthews & Angulo, 1980)。全体のタイプA行動尺度 (17項目) の他に、下位尺度として、競争性 (8項目)、焦燥・攻撃性 (9項目) を持つ。各項目は5件法で回答する。子どもにおける検査では、信頼性、妥当性が高く、使用頻度も多い。日本語版は、山崎と菊野 (1990) によって開発され、山崎 (1992)、黒田

(1992)によって応用されている。

⑧A型傾向判別表：

前田(1985)が、臨床経験に基づいて独自に開発した12問からなる簡易法で、タイプA行動判定法の中で、最も簡便なものの一つである。JASと相関がある($r=.72$)、CHD患者と健常者の得点に有意差が見られること、冠状動脈造影の所見との関連があることなどが確認されている。簡便、明快、即決な点や疾患との関連が明確となったことから臨床、研究両面で重要視されているが、質問項目数が少ないことから臨床現場や集団調査に向いていると言える。

⑨K G式日常生活質問紙(日本版成人用タイプA質問紙)：

米国と日本ではタイプA行動の要素に文化的社会的相違が見られることを鑑み、山崎・田中・宮田(1992)が、わが国の成人に適した独自の質問紙開発を試みた。作成にあたって留意された点は、第1に、米国の検査項目を直接には参考にせず、日本成人に適した独自の検査項目で構成された検査であること、第2に、男女、学生、社会人など全ての成人を検査対象者にできること、第3に、回答が3件法に単純化されていること、第4に、被検者の態度の中性化を保つため無関係な項目が挿入されていること、などである。標準化の手続きが進行中である。

⑩東海大式日常生活調査表：

日本で作成されたタイプA行動判定法の中で現在のところ最も精密に測定することが可能であり、臨床的検討も行われている(保坂他, 1984)。日本のタイプA行動の特徴をとらえるのに適しているとされるが、CHD発症率に関しては未検討である。但し、項目数がやや多いため(36問)、臨床向きではない。

⑪A型行動パターン・スクリーニングテスト：

スクリーニングに使用する目的で、上記の東海大式日常生活調査表の質問項目の中から統計的手法を用いて判別力のある項目を選別したものである(保坂他, 1984)。タイプA行動の傾向の強さにより、その傾向の強い方から、A1, A2, B2, B1の4段階に分類することが可能である(保坂・田川・日野原・高橋, 1989)。

⑫J C B S (Japanese Coronary-Prone Behavior Pattern Scale : J C B S)：

日本人のCHDに罹患しやすい行動パターン(Coronary-Prone Behavior Pattern : 以下CPBPと略記)とグローバルタイプA行動が必ずしも一致しないという報告を踏まえて、日本人のCPBPを判定する目的で開発が計画された(桃生他, 1990)。現在、TABPカンファランス(Type A Behavior Pattern Conference)によって、その開発が進行中である。

⑬Brief Assessment Scale for Type A in Clinical Setting (B A S T A C S)：

Friedman & Rosenman (1959)が最初にタイプA行動の概念を思いついたのは日常の診察時における患者の行動の観察の結果だったことを踏まえて、診察時に観察可能でありかつ重要と思われる因子を10項目選び出し、それを診察した医師が診察時に4段階で評価し、その合計点の多寡によってタイプA行動かタイプB行動かを判定する方法である(早野, 1990)。

以上、代表的なタイプA行動の査定法を概観したが、近年わが国のタイプA行動研究者の間には、日本では独自の文化や価値観に影響される特徴的なタイプA行動が存在するという共通認識が存在し、欧米で作成された判定法(たとえばJAS)の内容には日本人の生活習慣に合わない部分があるとの指摘も多い。また、日本で開発された判定法には、信頼性や妥当性の検討が十分になされているとはいいがたいという問題点が存在する。

そのような問題点を踏まえて日本で開発された判定法としては、たとえば、前述のJCBSを代表的な尺度としてあげることができる。しかし、そのようなJCBSにも、以下のような問題点がある。それは、①現時点では判定基準が示されていない、②下位尺度の関連性が不明確である、③心理検査の作成に不可欠な、信頼性、妥当性の検討が不十分である、④項目数が122項目と非常に多く、所要時間がかかり実践的でない、といった点である。このような問題点を補うといった観点から、瀬戸と長谷川(未発表)は、さらに新しいタイプA行動判定法(質問紙法)の開発を現在試み

ている。その新しいタイプA行動判定法「冠状動脈性心疾患親和型尺度」(Coronary-prone Type Scale: CTS)の基本的な考え方は以下の通りである。それは、①「日本のタイプA行動」を判定することを目的とする、②下位尺度に、うつ親和性性格(箕口・三宅・吉松・尾崎・伊藤, 1990)やソーシャルサポート(久田・千田・箕口, 1989; 箕口・千田・久田, 1989)といった新たな視点を採り入れ、かつ、敵意性を表出(行動)と抑圧(感情)の2面に分けて測定する、③標準化の手続き(信頼性や臨床的妥当性の検討など)を十分に行う、④項目数を約40項目程度にし、研究用にも臨床的判別用にも利用でき、かつ、その下位尺度のみでも十分に使用に耐えうるものとする、といった点である。

【今後の展望と課題】

心臓病医であるFriedmanとRosenmanによって、すなわち医学から研究が始まったタイプA行動は、その後、CHDに罹患しやすい者の行動パターンとして心理学からも研究が進められるよ

うになった。その詳細については、すでに概観してきたとおりであるが、とくに、タイプA行動の査定法に関する研究に対してJenkinsらが果たした役割と、タイプA行動者のストレスへの対処に関する研究に対してGlassの果たした役割は大きいと思われる。しかしながら、米国においては、近年グローバルタイプA行動のCHDに対する予測力に疑問がもたれていることに関連して、JASを含めた従来のタイプA行動の判定法について再検討が望まれているというのが現状である。また、わが国においても、グローバルタイプA行動と日本人のタイプA行動が必ずしも一致しないことから、新しい日本的タイプA行動判定法の開発が望まれている。一方、Glass(1977a)の特徴的な仮説である「タイプA行動と学習性無力感の関連」に対しても、Lovallo & Pishkin(1980)の反論が提出されており(Table 2)、今後は、動機づけや状況や課題内容など実験手続きに対して配慮をおこなったうえで、詳細な比較検討が必要だと思われる。

Table 2 Glass(1977a)の研究とLovallo & Pishkin(1980)の研究と比較

	課題の困難性	被験者のタイプ	先行段階でのコントロールの不可能度(長期・短期 or 強・弱)	テスト段階でのパフォーマンス成績	学習性無力感効果の有・無
Glass(1977a)	易	Type A	長期	悪化	有
			短期	向上	無
		Type B	長期	ほぼ一定	無
			短期	ほぼ一定	無
Lovallo & Pishkin(1980)	難	Type A	強	ほぼ一定	無
			弱	ほぼ一定	無
		Type B	強	悪化	有
			弱	ほぼ一定	無

きて、以上のように、タイプA行動は、心理学においても精力的に研究が進められてきたが、その背景には行動療法的な視点があった。つまり、これまでは、タイプA行動という顕在化した行動を観察することで客観的に対象を把握し、その特

定の行動に焦点をあてて変容をはかるといようなアプローチが可能であるとされてきた。しかし最近では観察不可能な人間の内面、すなわち認知が注目を浴びてきている。Bandura(1978)が述べているように人間の行動と認知(個人的要因)お

よび環境は相互に影響を及ぼし合っているため、行動を変容するために認知を変容させたり、逆に認知を変容させるために行動を変容したりすることが考えられるが、これまで行動のみに焦点をあてていたタイプA行動という概念も転換期を迎えるべきではないかと思われる。つまり行動だけから成り立つ概念としてタイプA行動をとらえるだけではそのすべてを把握したことはならず、行動と認知がいかにからみあうことでタイプA行動として顕在化するのかを明らかにすることが必要なのである。たとえば、タイプA行動は、CHDという身体疾患に対するリスクファクターでありながら、一方で、心筋梗塞で入院してきた患者はとくにその後の抑うつ状態が強いという臨床医の報告にもあるように、うつリスクファクターであるとも考えられる。すなわち、タイプA行動者をCHDに対するリスクだけを負う者として一面的にとらえるのではなく、ストレスに対する心身両面の脆弱性を持つ者として包括的にとらえる必要があると思われる。

また、タイプA行動は、職業要因や人間関係のような社会的環境、さらにライフスタイルのような文化的価値観が強く反映された概念であり、そのような意味において、現代社会の成り立ちに密接な関連がある。したがって、その研究には、biopsychosocialな観点や比較文化的な観点をはじめとする学際的な視野が必要不可欠であり、今後は医学や心理学以外の広範囲な分野からの研究も必要になってゆくと思われる。

【文 献】

- Averill, J. R. 1973 Personal control over aversive stimuli and its relationship to stress. *Psychological Bulletin*, 80, 286-303.
- Bandura, A. 1978 The self system in reciprocal determinism. *American Psychologist*, 33, 344-358.
- Blumenthal, J. A. 柴田仁太郎 (訳) 1990 タイプA行動パターンの判定方法 タイプA, 1, 5-17.
- Blumenthal, J. A., Burg, M. M., Barefoot, J., Williams, R. B., Haney, T., & Zimet, G. 1987 Social support, type A behavior, and coronary artery disease. *Psychosomatic Medicine*, 49, 3331-3340.
- Blumenthal, J. A., Herman, S., O'Toole, L. C., Haney, T. L., Williams, R. B., & Barefoot, J. C. 1985 Development of a brief self-report measure of the Type A (coronary prone) behavior pattern. *Journal of Psychosomatic Research*, 29, 265-274.
- Blumenthal, J. A., Williams, R. B., Kong, Y., Schanberg, S. M., & Thompson, L. W. 1978 Type A behavior pattern and coronary atherosclerosis. *Circulation*, 258, 634-639.
- Bortner, R. W. 1969 A short rating scale as a potential measure of pattern A behavior. *Journal of Chronic Diseases*, 22, 87-91.
- Bortner, R. W., & Rosenman, R. H. 1967 The measurement of pattern A behavior. *Journal of Chronic Diseases*, 20, 525-533.
- Brozek, J., Keys, A., & Blackburn, H. 1966 Personality differences between potential coronary and noncoronary subjects. *Annals of the New York Academy of Sciences*, 134, 1057-1064.
- Brunson, B. I., & Matthews, K. A. 1981 The type A coronary-prone behavior pattern and reactions to uncontrollable stress: An analysis of performance strategies, affect, and attributions during failure. *Journal of Personality and Social Psychology*, 40, 906-918.
- Burke, R. J. 1984 Beliefs and fears underlying Type A behavior: correlates of time urgency and hostility. *The Journal of General Psychology*, 112, 133-145.
- Byrne, D. 1961 The repression-sensitization scale: Rationale, reliability, and validity. *Journal of Personality*, 29, 334-349.
- Byrne, D. 1964 Repression-sensitization as a dimension of personality. In B. A. Maher

- (Ed.), *Progress in experimental personality research*. Vol.1. New York: Academic Press.
- Chesney, M.A., Black, G. W., Chadwick, J. H., & Rosenman, R. H. 1981 Psychological correlates of the Type A behavior patterns. *Journal of Behavioral Medicine*, 4, 217-229.
- Dembroski, T. M., Macdougall, J. M., Williams, R. B., Jr., Haney, T. L., & Blumenthal, J. A. 1985 Components of Type A hostility, and anger-in: Relationship to angiographic findings. *Psychosomatic Medicine*, 47, 219-233.
- Diamond, E. L. 1982 The role of anger and hostility in essential hypertension and coronary heart disease. *Psychological Bulletin*, 92, 410-433.
- Dimsdale, J. E., Hackett, T. P., Hutter, A. M., Block, P. C., Catanzano, D. M., & White, P. J. 1979 Type A behavior and angiographic findings. *Journal of the Psychosomatic Research*, 23, 273-276.
- Ditto, W. B. 1982 Daily activities of college students and the construct validity of the Jenkins Activity Survey. *Psychosomatic Medicine*, 44, 537-543.
- Dodd, N., Conti, M., & Sime, W. E. 1983 The convergence of questionnaire Type A measures and the Structured Interview, paper presented at the *Annual Meeting of the Society of Behavioral Medicine*, Baltimore, Maryland.
- Dorian, B., & Taylor, C. B. 1984 Stress factors in the development of coronary artery disease. *Journal of Occupational Medicine*, 26, 747-756.
- Friedman, M., & Rosenman, R. H. 1959 Association of specific overt behavior pattern with blood and cardiovascular findings. *Journal of the American Medical Association*, 96, 1286-1296.
- Friedman, M., & Rosenman, R. H. 1971 Type A behavior pattern: Its association with coronary heart disease. *Annals of Clinical Research*, 3, 300-312.
- 福西勇夫・中川賢幸・中村寛志・尾川丈一・中川哲也 1993 タイプA行動パターンの日米比較研究 タイプA, 4, 67-71.
- Ganster, D. C., Schaubroeck, J., Sime, W. E., & Mayes, B. T. 1991 The nomological validity of the Type A personality among employed adults. *Journal of Applied Psychology [Monograph]*, 76, 143-168.
- Gastorf, J. W., Suls, J., & Sanders, G. S. 1980 Type A coronary-prone behavior pattern and social facilitation. *Journal of Personality and Social Psychology*, 38, 773-780.
- Gastorf, J. W., & Teevan, R. C. 1980 Type A coronary-prone behavior and fear of failure. *Motivation and Emotion*, 4, 71-76.
- Glass, D. C. 1977a *Behavior patterns, stress, and coronary disease*. Hillsdale, N. J.: Erlbaum.
- Glass, D. C. 1977b Stress, behavior patterns, and coronary disease. *American Scientist*, 65, 177-187.
- Green, H. B., & Knapp, R. H. 1959 Time judgment, aesthetic preference, and need for achievement. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 58, 140-142.
- Grimm, L. G., & Yarnold, P. R. 1984 Performance standards and the Type A behavior pattern. *Cognitive Therapy and Research*, 8, 59-66.
- Hamberger, L. K., & Hastings, J. E. 1986 Irrational beliefs underlying Type A behavior: Evidence for a cautious approach. *Psychological Reports*, 59, 19-25.
- 長谷川浩・木村登紀子・関口守衛・中島由美子 1981 冠状動脈疾患患者のパーソナリティ特性

- 日本医事新報, 2993, 43-49.
- 長谷川尚子 1992 時間的側面からのタイプA行動の検討 早稲田大学第一文学部平成4年度卒業論文.
- 長谷川尚子・小杉正太郎 1993 Type A 行動における時間的展望 日本心理学会第57回大会発表論文集, 57.
- 服部正樹・福西勇夫 1993 タイプA行動パターンとうつの再検討: うつ状態とうつ親和性性格との関連より タイプA, 4, 24-27.
- 早野順一郎 1990 第2回TABPカンファレンス タイプA, 1, 72-76.
- 早野順一郎・山田 彰・向井誠時・竹内 聡・堀礼子・大手信之・藤波隆夫 1991 心臓副交感神経機能低下と冠動脈アテローム硬化 タイプA, 2, 61-69.
- Haynes, S. G., Feinleib, M., & Kannel, W. B. 1980 The relationship of psychosocial factors to coronary heart disease. *American Journal of Epidemiology*, 111, 37-58.
- Haynes, S. G., Levine, S., Scotch, N., Feinleib, M., & Kannel, W. B. 1978 The relationship of psychosocial factors to coronary heart disease in the Framingham Study: I. Methods and risk factors. *American Journal of Epidemiology*, 107, 362-383.
- 久田 満・千田茂博・箕口雅博 1989 学生用ソーシャル・サポート尺度作成の試み(1) 日本社会心理学会第30回大会発表論文集, 143-144.
- Holmes, T. H., & Rahe, R. H. 1967 The social readjustment rating scale. *Journal of Psychosomatic Research*, 11, 213-218.
- 保坂 隆 1987 A型行動パターンと抑うつの関連性について: 健康診断受診者における検討 臨床精神医学, 19, 353-360.
- 保坂 隆・田川隆介・大枝泰彰・杉田 稔・日野原茂雄・五島雄一郎 1984 A型行動パターンと虚血性心疾患: 質問表の作成 心身医学, 24, 23-30.
- 保坂 隆・田川隆介・日野原茂雄・高橋為生 1989 健診におけるA型行動パターン評価の意義: スクリーニングテストの作成 日本総合健診医学会誌, 16, 32-27.
- 保坂 隆・田川隆介・杉田 稔・五島雄一郎 1989 わが国における虚血性心疾患患者の行動特性: 欧米におけるA型行動パターンとの比較 心身医学, 29, 528-536.
- 石原俊一 1985 学生用 Jenkins Activity Survey (JAS) 日本語版の検討 同志社心理, 32, 1-9.
- 石原俊一 1987 学生用 Jenkins Activity Survey (JAS) 日本語版の検討II 同志社心理, 34, 13-20.
- 石原俊一 1990 学生用 Jenkins Activity Survey (JAS) の検討 日本健康心理学会第3回大会発表論文集, 40-41.
- Jenkins, C. D. 1971 Psychologic and social precursors of coronary disease. *New England Journal of Medicine*, 294, 307-317.
- Jenkins, C. D., Rosenman, R. H., & Friedman, M. 1967 Development of an objective psychological test for the determination of the coronary prone behavior pattern in employed men. *Journal of Chronic Diseases*, 20, 371-379.
- Jenkins, C. D., Zyzanski, S. J., & Rosenman, R. H. 1979 *Jenkins Activity Survey (Form C) Manual*. New York: Psychological Corporation.
- Jenkins, C. D., Zyzanski, S. J., Ryan, T. J., Flessas, A., & Tannenbaum, S. I. 1977 Social insecurity and coronary-prone Type A responses as identifiers of severe atherosclerosis. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 45, 1060-1067.
- 神村栄一・山野美樹・岡安孝弘・鳴田洋徳・坂野雄二 1992 認知的対処のタイプと恐怖・不安反応に関する実験的検討: 最近の研究動向と今後の課題 早稲田大学人間科学研究, 5, 159-170.
- 川上憲人・下光輝一・岩根久夫 1993 仕事の要求度およびコントロール 桃生寛和・早野順

- 一郎・保坂 隆・木村一博(編) タイプA行動パターン 星和書店 Pp.197-203.
- 黒田裕子 1992 子どものタイプA行動の表出に及ぼす下位特性と脅威的状况の效果 教育心理学研究, 40, 340-347.
- Lawler, K. A., Allen, M. T., Critcher, E. C., & Standard, B. A. 1981 The relationship of physiological responses to the coronary-prone behavior pattern in children. *Journal of Behavioral Medicine*, 4, 203-216.
- Lazarus, R. S., & Cohen, J. B. 1977 Environmental Stress. In I. Attman & J. F. Wohlwill(Eds.), *Human behavior and the environment: Current theory and research*. Vol.2. New York: Plenum.
- Lazarus, R. S., & Folkman, S. 1984 *Stress, appraisal, and coping*. New York: Springer Publishing Company.
- Light, K. C., Herbst, M. C., Bragdon, E. E., Hinderliter, A. L., Koch, G. G., Davis, M. R., & Sheps, D. S. 1991 Depression and Type A behavior pattern in patients with coronary artery disease: Relationship to painful versus silent myocardial ischemia and β -endorphin responses during exercise. *Psychosomatic Medicine*, 53, 669-683.
- Lovallo, W. R., & Pishkin, V. 1980 Performance of Type A (coronary prone) men during and after exposure to uncontrollable noise and task failure. *Journal of Personality and Social Psychology*, 38, 963-961.
- 前田基成・東條光彦・坂野雄二 1988 タイプA行動パターンと Self-Efficacy 認知に関する検討: Self-Efficacy の研究 7 日本行動療法学会第14回大会発表論文集, 54-55.
- 前田 聡 1985 虚血性心疾患患者の行動パターン: 簡易質問紙法による検討 心身医学, 25, 297-306.
- 前田 聡 1987 虚血性心疾患患者の行動パターン: J A S (Jenkins Activity Survey) による検討(第1報) 心身医学, 27, 430-437.
- 前田 聡 1989 タイプA行動パターン 心身医学, 29, 517-524.
- 前田 聡 1991 行動パターン評価のための簡易質問紙法「A型傾向判別表」 タイプA, 2, 33-40.
- Matthews, K. A., & Angulo, J. 1980 Measurement of the Type A behavior pattern in children: Assessment of children's competitiveness, impatience-anger, and aggression. *Child Development*, 51, 466-475.
- Matthews, K. A., & Haynes, S. G. 1986 Type A behavior pattern and coronary risk. *American Journal of Epidemiology*, 123, 923-926.
- Matthews, K. A., & Siegel, J. M. 1983 Type A behaviors by children, social comparison, and standards for self-evaluation. *Developmental Psychology*, 19, 135-140.
- McCann, B. S., & Matthews, K. A. 1988 Influences of potential for hostility, Type A behavior, and parental history of hypertension on adolescents' cardiovascular responses during stress. *Psychophysiology*, 25, 503-511.
- 三部奈々恵・木村一博・山澤増宏・平山陽示・清見定道・永井義一・室田敬一・伊吹山千晴 1992 人間ドックにおけるタイプA行動パターンに関する検討(第1報): その心理的側面と従来の冠危険因子および職業との関連について 心身医学, 32, 331-338.
- Miller, S. M. 1979 Coping with impending stress: Psychophysiological and cognitive correlates of choice. *Psychophysiology*, 16, 572-581.
- Miller, S. M., & Grant, R. P. 1979 The blunting hypothesis: A view of predictability and human stress. In P. O. Sjoden, & S. Bates(Eds.), *Trends in behavior therapy*. New York: Academic Press.
- 箕口雅博・三宅由子・吉松和哉・尾崎 新・伊藤

- 隆一 1990 世代社会精神医学的研究のための尺度開発：「うつ病親和性性格傾向(D R P) 尺度」の信頼性および妥当性 社会精神医学, 30, 145-146.
- 箕口雅博・千田茂博・久田 満 1989 学生用ソーシャル・サポート尺度作成の試み(2) 日本社会心理学会第30回大会発表論文集, 143-144.
- 桃生寛和 1993 タイプA行動パターンはストレス関連疾患全般の危険因子か? タイプA, 4, 21-23.
- 桃生寛和・木村一博・早野順一郎・保坂 隆・柴田仁太郎 1990 日本人に適した新しいタイプA行動パターン評価法(J C B S)の開発 タイプA, 1, 19-29.
- Musante, L., Macdougall, J. M., Dembroski, T. M., & van Horn, A. E. 1983 Component analysis of the Type A coronary-prone behavior pattern in male and female college students. *Journal of Personality and Social Psychology*, 45, 1104-1117.
- 岡安孝弘・嶋田洋徳・丹羽洋子・森 俊夫・矢富直美 1992 中学生の学校ストレスラーの評価とストレス反応との関連 心理学研究, 63, 310-318.
- Orth-Gomer, K., & Unden, A. L. 1990 Type A behavior, social support, and coronary risk: Interaction and significance for mortality in cardiac patients. *Psychosomatic Medicine*, 52, 59-72.
- 尾関友佳子・原口雅浩・津田 彰 1991 大学生の生活ストレスラー, コーピング, パーソナリティとストレス反応 健康心理学研究, 4 (2), 1-9.
- Pittner, M. S., & Houston, B. K. 1980 Response to stress, cognitive coping strategies, and the Type A behavior pattern. *Journal of Personality and Social Psychology*, 39, 147-157.
- Pittner, M. S., Houston, B. K., & Spiridigliozzi, G. 1983 Control over stress, Type A behavior pattern, and response to stress. *Journal of Personality and Social Psychology*, 44, 627-637.
- Price, V. A. 1982 *Type A behavior pattern: A model for research and practice*. New York: Academic Press.
- Rhodewalt, F., & Davison, J., Jr. 1983 Reactance and the coronary-prone behavior pattern: The role of self-attribution in responses to reduced behavioral freedom. *Journal of Personality and Social Psychology*, 44, 220-228.
- Rosenman, R. H. 1978 The interview method of assessment of the coronary-prone behavior pattern. In T. M. Dembroski, S. M. Weiss, J. L. Shields, S. Haynes, & M. Feinleib (Eds.), *Coronary - Prone Behavior*. New York: Springer-Verlag, Pp. 55-69.
- Rosenman, R. H., Brand, R. J., Jenkins, C. D., Friedman, M., Straus, R., & Wurm, M. 1975 Coronary heart disease in the Western Collaborative Group Study: Final follow-up experience of 8 1/2 years. *Journal of the American Medical Association*, 233, 872-877.
- Rosenman, R. H., & Friedman, M. 1961 Association of specific behavior pattern in women with blood and cardiovascular findings. *Circulation*, 24, 1173-1184.
- Rosenman, R. H., Friedman, M., Straus, R., Wurm, M., Kositchek, R., Hahn, W., & Werthessen, N. T. 1964 A predictive study of coronary heart disease: The Western Collaborative Group Study. *Journal of the American Medical Association*, 189, 15-22.
- Rosenman, R. H., Swan, G. E., & Carmelli, D. 1988 Definition, assessment, and evolution of the Type A behavior pattern. In B. K. Houston, & C. R. Snyder (Eds.), *Type A Behavior Pattern Research, Theory and Intervention*. New York: John

- Wiley & Sons Inc, Pp. 8-31.
- 坂野雄二 1990 自己効力感と行動変容 現代のエスプリ, 279, 70-78.
- 坂野雄二・瀬戸正弘・前田基成・東條光彦・佐藤豪・杉山善朗・上里一郎 1990 疾患とパーソナリティ(行動様式)の関連性, 発病予防のための認知的行動療法の研究 喫煙科学研究財団研究年報, 777-779.
- 佐藤 豪・杉山善朗・竹川忠男・中村 浩 1982 Jenkins Activity Survey (JAS) 学生用の検討: 項目分析と因子分析による検討 札幌医科大学人文自然科学紀要, 23, 15-22.
- 佐藤 豪・杉山善朗・竹川忠男・中村 浩 1983 Jenkins Activity Survey (JAS) 学生用の検討(II): 他の性格検査との関連性について 札幌医科大学人文自然科学紀要, 24, 17-24.
- Schlegel, R. P., Wellwood, J. K., Copps, B. E., Gruchow, W. H., & Sharratt, M. T. 1980 The relationship between perceived challenge and daily symptom reporting in Type A vs. Type B postinfarct subjects. *Journal of Behavioral Medicine*, 3, 191-204.
- Seligman, M. E. P. 1975 *Helplessness: On depression, development and death*. San Francisco: W. H. Freeman.
- Seligman, M. E. P., & Maier, S. F. 1967 Failure to escape traumatic shock. *Journal of Experimental Psychology*, 74, 1-9.
- 瀬戸正弘 1993 長期コントロール不可能事態がタイプA行動者の認知的活動と行動遂行に及ぼす影響 早稲田大学大学院人間科学研究科平成4年度修士論文.
- Shekelle, R. B., Hulley, S., Neaton, J., Billings, J., Borhani, N., Gerace, T., Jacobs, D., Lasser, N., Mittlmark, M., Stamler, J., & the MRFIT Research Group 1985 The MRFIT behavioral pattern study: II. Type A behavior pattern and incidence of coronary heart disease. *American Journal of Epidemiology*, 122, 559-570.
- 芝山幸久 1993 症例から見たタイプA行動パターンと抑うつについて: 心療内科の立場からタイプA, 4, 28-31.
- 嶋田洋徳・岡安孝弘・浅井邦二・坂野雄二 1992 児童の心理的学校ストレスとストレス反応の関連 日本健康心理学会第5回大会発表論文集, 56-57.
- 下田光造 1950 躁うつ病について 米子医学雑誌, 2, 1-2.
- 白川奏恵・桃生寛和 1990 タイプA行動パターンがうつ病の発症に関与していたと思われる1症例 タイプA, 1, 83.
- Smith, T. W., & Anderson, N. B. 1986 Models of personality and disease: An interactional approach to Type A behavior and cardiovascular risk. *Journal of Personality and Social Psychology*, 50, 1166-1173.
- Smith, T. W., & Brehm, S. S. 1981 Cognitive correlates of the Type A coronary-prone behavior pattern. *Motivation and Emotion*, 5, 215-233.
- Speisman, J. C., Lazarus, R. S., & Mordkoff, A. 1964 Experimental reduction of stress based on ego-defense theory. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 68, 367-380.
- 田川隆介・保坂 隆 1991 「東海大式日常生活調査表」による Coronary-prone Behavior Pattern の評価 タイプA, 2, 23-32.
- 田川隆介・保坂 隆 1993 日本的タイプA行動パターンと抑うつの関連性について タイプA, 4, 16-20.
- Tellenbach, H. 1961 *Melancholie*. Heidelberg: Springer.
- Thoresen, C. E., & Powell, L. H. 1992 Type A behavior pattern: New perspectives on theory, assessment, and intervention. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 60, 595-604.
- 東條光彦・前田基成・坂野雄二 1990 大学生タイプA行動者の Self-Efficacy 認知に関する検討 日本行動療法学会第16回大会発表論

- 文集, 82-83.
- 上畑鉄之丞 1990 T A B Pの疫学的研究課題
タイプA, 1, 37-43.
- Williams, R. B., Haney, T., Lee, K. L.,
Kong, Y., Blumenthal, J., & Whalen, R.
E. 1980 Type A Behavior, hostility, and
coronary atherosclerosis. *Psychosomatic
Medicine*, 42, 539-549.
- Woodall, K. L., & Matthews, K. A. 1989
Familial environment associated with
Type A behaviors and psychophysiological
responses to stress in children. *Health
Psychology*, 8, 403-426.
- 山口 剛 1991 タイプA行動パターンと情動ス
トレス並びに情動表出機序について タイプ
A, 2, 79-91.
- 山崎勝之 1992 幼児のタイプA特性と要求水
準: 要求水準の基本的特徴とリスク・テイキ
ングならびに競争事態におけるその変化 心
理学研究, 63, 51-54.
- 山崎勝之・菊野春雄 1990 日本語版幼児用
Type A 検査 (MYTH) の作成 心理学研
究, 61, 155-161.
- 山崎勝之・田中雄治・宮田 洋 1992 日本版成
人用タイプA質問紙 (KG式日常生活質問
紙): 標準化の過程と実施・採点方法 タイプ
A, 3, 33-45.
- Yarnold, P. R., & Grimm, L. G. 1982 Time
urgency among coronary-prone individ-
uals. *Journal of Abnormal Psychology*,
91, 175-177.
- 吉竹 博 1989 タイプA行動と疲労感 労働科
学, 65, 296-302.
- 吉竹 博 1990 タイプA行動パターンの諸特性
日本心理学会第54回大会発表論文集, 123.
- Zyzanski, S. J., Jenkins, C. D., Ryan, T.
J., Flessas, A., & Everist, M. 1976
Psychological correlates of coronary angio-
graphic finding. *Archives of Internal
Medicine*, 136, 1234-1237.
- <付 記>
本論文の作成にあたり, 人間健康科学科4年深
代和信君にご協力いただきました。